

2020.08.15.

T.Kobayashi

千葉から戦争を考える その1 蘇我駅前のお寺から見たもの

内房線と外房線の分岐点である蘇我駅は、京葉線の始発駅でも有り交通の要衝になっている。サッカーブームの今では、JEFユナイテッドの試合が行われることが多いフクダ電子アリーナの最寄り駅として有名で、試合がある日にはかなりの人が押し寄せる。駅の西側にある蘇我コミュニティセンターの隣に福正寺というお寺がある。創建された頃には、寺の前には東京湾が広がっていたことと思うが現在では埋め立て地が広がり、海の香りを感じることもない。福正寺は墓地が横長に広がり、車が走れるような小道が墓地の中を通り抜けている。蘇我コミュニティセンターの階上から見ると、海のように広がる墓地が景色としては印象的だ。しかし、「夜になると何となく怖い」と言う人もいるが、どこのお寺にもある「怖さ」と同じかもしれない。

立派な山門に導かれて入っていくと、正面に本堂、右側には鐘楼もある重厚な佇まいに圧倒される。万治元年に創建された浄土宗の寺で、正式名称は「薬師山高巖院福秀寺」と言った。元禄 13 年に日意上人が宗旨を改めて「日蓮宗富士山福正寺」として再開山したという変わり種。広い墓地に、何かを見つけられそうな興味深さを感じて足を踏み入れてみた。「平和の礎」と書かれた大きな石碑が建っているの、近づいて文字を読み取って見たら「千葉県遺族会」と彫ってあった。そしてその先へ歩を進めていくと、古そうな墓石の間にひときわ大きな墓石が見つかった。「蘇我町戦災死者の墓」と刻まれた文字に引きつけられて、脇に立つ墓碑に刻まれた文字を読んでみた。「1945年6月10日、早朝この地にあった日立航空機千葉工場を狙った B29 の爆撃により、蘇我 1 丁目住民 129 名を含む 152 名の被害者が出た。その霊を慰めるべくここに墓石を建てた」と記述があった。

第二次世界大戦のまっただ中、海軍航空本部長山本五十六中将が財閥や大手企業に対して「航空機製造」の要求を出した。これに呼応して東京瓦斯電気工業（神風を開発した会社）が動き、後に日立製作所に経営権を譲渡し、日立航空機千葉工場が誕生した。工場は 1942 年（昭和 17 年）に蘇我・今井地区の海を埋め立てて作られ、1944 年には軍用機の製造を開始。海を命の糧としていた近隣の住民の中には、心穏やかならざる者も少なくなかったことと思う。昭和 40 年代に千葉の海浜埋め立てによって新しい町が作られたが、それより 20 年以上前の出来事になる。最盛期にはこの工場の労働者数は 12,000 人ほど。この工場の他に、千葉高等女学校・千葉師範女子部などにも分散工場が設置され、大網には多数のトンネル内工場や地下工場も作り始めたのだが……。1945年6月の千葉空襲では軍需工場が対象となり、千葉工場・分散工場なども B29 による爆撃を受けた。さらに不幸なことに爆撃の標的を誤ったことにより、蘇我地区の住宅地までが爆撃を受ける結果となり、総計 152 名の戦死者が出た。この中には前述の女学校・師範学校の生徒・講師・雇員も含まれる悲惨な結末となった。千葉市では、5 月・6 月・7 月の計三回空襲を受け、戦災死者は 1000 人を越えた。

終戦となり軍需工場は必要がなくなったのは当然のことであるが、恐らく工場撤去等の作業が素早く行われことと想像するのだが……。

1950 年、日立航空機千葉工場跡地に川崎製鉄千葉製鉄所を建設することが決定し、翌年（1951 年）に着工した。

1952 年、千葉市が埋め立て地を川崎製鉄に譲渡、そして 1953 年一号高炉の火入れが行われて、「鉄の町千葉」がスタートした。

その後、1956 年には東京電力千葉火力発電所も運転開始して、蘇我は名実共に京葉工業地帯の一翼を担う町になった。全国各地にも例を見るように、新生工業地帯は「公害」の問題も数多く生み出した。

そしてそれからさらに 50 年、2000 年に川崎製鉄は国内 2 位の日本鋼管(NKK)との経営統合を決め、事業を再編。蘇我の町のシンボルだった「川崎製鉄千葉製鉄所(通称:かわてつ)」は、2003 年には「JFE スチール東日本製鉄所」と名を変えた。

埋め立て地に付けられた「中央区川崎町」という町の名前だけが、歴史の生き証人として残っているのだが、やがては「町の名の由来」も語り継がれなくなるのかもしれない。

蘇我駅周辺は、昔は千葉郡今井村と言った。1889 年(明治 22 年)に近隣の蘇我野村・宮崎村・大森村・赤井村・小花輪村・生実郷が合併して蘇我野村となった。現在の蘇我・今井・宮崎などの町名の起源はこんなところにある。

「蘇我」という地名の由来をたどると・・・

1500 年前に創建されたという蘇我比咩(そがひめ)神社に残る記述によれば、日本武尊が東征の折、船で千葉沖に差し掛かった際、暴風雨に襲われて身に危険が迫った。この時に同船していた弟橘姫が、竜神の怒りを静めるべく同道の 5 人の姫達と共に海に身を投じて、この難を救った。身を投じた 5 人の内の一人である蘇我の大臣の娘(比咩)が近くの浜辺に打上げられ、村人に介抱されて無事都に帰ることが出来た。

村人達は、帰途で、命を落とした日本武尊の霊を慰めるべく社を建てて神として祀った。これを知った応神天皇は村人達の心に報いるため、蘇我一族を国造として派遣してこの地を治めさせ、守護神として蘇我比咩神社を建立した。

ところが地名の由来にはもう一説あった。浜辺に打上げられたのは弟橘姫で、村人の介抱で蘇生した時に「我蘇り」と言ったことから「蘇我」の地名が誕生したという。地名の由来は、どこの土地の場合も 同じように、諸説あり真説がどれかは不明とするものが多い。

古代の歴史については、歴史の勝者が書き残した文献が後世に伝える記録となることが多いので、今となっては真偽もわからぬものは数多いようである。

これから 50 年・100 年と時が流れた後に、「海を埋めて作った軍需工場があった」ことも、「無益な戦争の被害を受けた町」であることも「大陸や東南アジアに進出して国益拡大に走った国があった」ことも忘れられてしまったり消えてしまったりするのかもしれない。

以上

◆注:本文書は、既作の自書の文献から抜粋し、加筆したものです。